

呼び名 呼称と敬称

新井 宏

「晋ちゃん、晋ちゃん！」。

奈良市で8日、凶弾に倒れた自民党の安倍晋三元首相が搬送された奈良県立医大病院（奈良県橿原市）に駆け付けた妻の昭恵さんは、安倍氏の意識の回復を願って名前を繰り返し呼び呼んだものの、思いは届かなかった。党関係者が9日、最期をみとった際の様子を明らかにした。
(2022/07/09 各紙電子版ほぼ全て同文)

多くの関係者が同席している中でも、昭恵さんにとっては「晋ちゃん」が最もふさわしい呼びかけだったのであろう。

幼なじみかと思うと、お見合で結婚したという。晋三氏が三十三歳、昭恵さんが二十五歳の時だという。子供のない家庭だったので、最初の呼称がそのまま固定したのであろうか。あるいは、お坊ちゃま氣質が抜けなかつた

た晋三氏を永田町では「晋ちゃん」とか「アベちゃん」と呼んでいたというからその影響を受けたのであろうか。いや、その逆であろうか。

それにしても夫婦の私的な場での「呼称」は、どうなっているのか気になる。

一、夫婦間の呼称

我が家では、妻を「和ちゃん」と呼んでいる。最初は「齊藤さん」、それから「和子さん」そして「和ちゃん」と進化して、そこで止まってしまった。まあ、一般的な部類ではあろう。

ところが妻は私のことを今も「お兄さん」と呼ぶ。日本金属工業の新人社員の頃、会社からバスを仕立てて、スキー旅行や山登りを企画することが多かったが、バスを満席で走らせたか、妹に人数合わせを頼んだところ高

校時代の友達を大勢連れてきた。最初の頃はみんな「新井さんのお兄さん」とか「美枝子さんのお兄さん」と呼んでいたが、だんだん「お兄さん」になり、ついにグループ内ではそれが固有名詞になってしまった。

その中にいた妻は、個人的な付き合いが始まって、相変わらず「お兄さん」で、婚約する頃には妻の妹達も「お兄さん」と呼び始めた。ここまでは特に問題はない。それが妻の父母に伝染し、みんな「お兄さん」と言うようになると、妻の親類縁者までそれを見習った。そこで進化は止まり子供が四人生まれても、我が家では「お兄さん」のままである。因みに我が家の長男のことは「お兄ちゃん」と呼んで区別していた。

娘のところの次男坊の孫に妻がからかわれている。いま「おじいさんのことをお兄さん」といったでしょう。妻が「おじいさんといったのよ」と強弁するのだが、孫は確かに「お兄さん」と聞こえた主張している。

孫達は幼い頃から、我が家に来るのを楽しみにしていた。「いつもポケモンセンターに連れて行ってくれるおじいさん」、「地下鉄乗車一筆書きの企画に付き合ってくれるおじいさん」、「何でも買ってくれるおじいさん」と評判は上々で、しばしば上京しては我が家に泊まっていた。もちろん、その頃も妻から「お兄さん」と呼ばれていた時代で、彼らの耳にも馴染んでいたはずなのに、すっかり忘れてしまったらしい。

英語などでは、相手に対する直接的な「呼称」は、夫婦間でも親族間でも職場でも、その相対的な位置関係によらず「You」が普通だという。ところが日本では、性別・親族・長幼・地位などにより相応しい「呼称」を選んで用いることが常識で有り、夫婦間の直接的な「呼称」だけでもかなり多様である。第三者に対して用いる間接的な「呼称」も、夫、主人、旦那、連れ合い、うちの人、宿六、パートナーなどの他に、名字、名前などあり、どの「呼称」も座り心地が良く無いようである。

夫婦間の呼びかけについては、お父さん・お母さん系、名前系、あなた・おまえ系、おい・ちよつと系、などに分類して調査した結果をいくつか入手したので表Iに示す。ついでに韓国での調査結果も載っていたので、おおよその対応関係も併記する。

英語圏との際だった違いは、「お父さん」「お母さん」で代用する場合は圧倒的に多いことである。これはもちろん「子供のお父さん」、「子供のお母さん」の省略形であろうが、子供達の使う呼称をそのまま借用しているとも言える。調査地域や調査年齢が一応全国ベースとなっている林炫情論文によれば、おおよそ次の通りである。

妻が夫を呼ぶ時、お父さん系54%、名前系30%、あなた系14%、夫が妻を呼ぶ時、お母さん系23%、名前系59%、おまえ系9%である。

なお細目で見ると、最も多い夫の呼称は「お父さん」

で32%、最も多い妻の呼称は「名前」で46%である。昭恵さんのように夫を「名前+ちゃん」で呼ぶ場合は3%、我が家のように夫を「お兄さん」と呼ぶ場合は林論文には見かけないが津留論文に1%ある。まあ、かなり珍しい部類であろう。なお、林論文で紹介された韓国

う韓国では、呼びかける側が男性か女性かによって父母や兄弟の呼称が変わる。男性の場合、父の呼称はほとんど「アボジ」で幼児語の「アッパ」はごく稀であるが、女性の場合、「アボジ」もかなりあるにはあるが、幼児語の「アッパ」が主体である。

表1 夫婦間の呼称分布(日本と韓国の比較)

調査対象	性別		年代別					
	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
日本	37	65	2	51	17	12	16	4
韓国	50	50	1	39	39	14	6	0

	日本の呼称		計(%)	韓国の呼称		計(%)	
		%			%		
妻	おとうさん	32.4	54.0	子供の名+おとうさん	20.0	22.6	
	おとうちゃん	5.4		子供の名+父	1.3		
	とうさん	2.7		aebi	1.3		
	とーと	2.7					
	パパ	10.8					
夫	名前+くん	8.1	21.6	名前+氏	11.3	13.8	
	名前+さん	5.4		名前	2.5		
	名前+ちゃん	2.7					
	名前+にいちちゃん	2.7					
	名前	2.7					
	ニックネーム+くん	5.4		13.5	ニックネーム		1.3
	ニックネーム+ちゃん	5.4					
	あなた	8.1	13.5	yobo,yeoboya (あなた)	25.0	40.0	
	あんた	2.7		dangshin (あなた)	7.5		
	ダーリン	2.7		oppa (兄さん)	5.0		
				書房様、社長様	2.5		
夫	おかあさん	14.3	22.9	子供の名+おかあさん	17.6	25.1	
	かあさん	2.9		子供の名+aya	6.8		
	ママ	5.7		子供の名+i	2.7		
	名前	45.7		名前+aya	16.2		
	名前+ちゃん	5.7		名前、名前+氏	12.2		
妻	ニックネーム+ちゃん	8.6	17.2	yeobo (あなた)	25.7	42.0	
	ニックネーム	2.9		dangshin (あなた)	4.1		
	あだな	5.7		jaki,jakiya	10.8		
	おまえ	2.9		gaksi (お人形)	1.4		
	おい	5.7					
				8.6			

の場合を整理すると、日本とは異なり。妻が夫を呼ぶ時、子供の名前+お父さん系が28%、夫が妻を呼ぶ時、子供の名前+お母さん系が27%である。いわば韓国における「お父さん」、「お母さん」は理屈っぽく「子供のお父さん」、「子供のお母さん」と呼んでいるのに対して、日本では子供の名前を省略して子供に成り代わっている形なのである。

その韓国では妻が夫を「オッパ(お兄さん)」と呼ぶ例が5%もある。勝手な推測であるが、韓国では街娼が客を誘う時の呼びかけも「オッパ(お兄さん)」である。津留論文に妻から夫への呼びかけに「お兄さん」を載せているのは、関西に在日韓国人が多い関係ではなからうかと思つた。

ところで、老若男女の序列に気を遣

兄の呼称は男性からの場合ほとんど漢語の「ヒヨン(兄)」であるが、女性からの場合は逆に幼児語の「オッパ」を用いる。これを街娼達も借りている訳である。

その他、姉の呼称は男性側から「ヌナ」であるが、女性側から「オンニ」、オジやオバ、オイやメイなども、親族と義理の関係で異なりとても覚えきれない。このような状況は親族の範囲が日本よりもはるかに広い韓国でも、近年は極度の小字化が進み、状況は急変している。

同様に私の経験ではないが、韓国では初対面の時、年齢を聞かれることが多いと言う。自分の年齢や立場によって相手への呼び方が変わるので、まずはその確認から始めるのだという。同じく仕事などオフィシャルな場面では役職や名前(+氏)で呼ぶのが普通なのでかなり気を使うようだ。そのためか、副教授に対しても学生達が「教授」と呼んでいるので、教授に昇進したのかと思うと、そうではなく「副」を省略しただけだと言う。その反対に、学長(韓国では学部長のこと)から教授に戻つても学長と呼んでいる例もあった。格上の呼称を使つていけば無難と言うことらしい。

二、役職呼称か「さん付け」か

日本も韓国と同様に、会社や役所、各種団体などで呼称に役職名を使う。

最近インターネットで、年上・年下関係なく「さん付

け」で呼び合う組織には「パワハラはない」という記事を見かけた。

私は昭和35年に日本金属工業に就職した年から、会社では原則「さん付け」を実行しようと心がけていた。しかし、新入社員のかせに、部長や課長にいきなり役職名を付けずに、「さん付け」で呼ぶのは、非礼と受け取られるので用心しながらであった。その他は、役付前の先輩を含め、同僚、後輩や女性に対して「さん付け」を実行した。後輩に「さん付け」する者など居ない中であり「変な奴」とは思われたであろう。

実は、そんなことを「決意」したのは、東京工業大学新聞部の経験からである。小山台高校時代、新聞部に所属して数ヶ月に一回、日刊紙なみ二頁のプランケット版を発行、その他に校舎中央階段踊り場の黒板に手書きで不定期ながら「黒板新聞」を発行していた。進学高で教師からは白眼視されながらも楽しい経験であった。

そして東工大入學と同時に新聞部に入部したのである。吉本隆明や奥野健男も在部していたと聞いているが、工系系の大学にあつては、戦後まもなくの文芸活動の寄り場であつたようで、それが後に、宮城音弥氏(心理学)、伊藤整氏(英文学)、鶴見俊輔氏(哲学)、永井道雄氏(社会学)、川喜多二郎氏(文化人類学)、永井陽之助氏(政治学)、江藤淳氏(文学)、池上彰氏など、いずれも戦後日本の世論を形成、牽引した錚々たる面々を教授として

招く礎になっていた。

しかし、在学当時の新聞部は唯々月一回の発行に追われていた。各学年数名の入部者があつたが、実働部員は常時4〜5名しか確保できず、とにかく良くぞ発行を続けたものだと思う。そんな状態から生まれた知恵だったのであるが、部に部長とか編集長とかは一切置かなかつた。ひたすら紙面を埋めることが最優先で、学生運動に対する意見なども保守から左翼までばらばらであつたが、それでも新聞発行という目的のもとで良く協力しあつていた。

どう考えても、変な組織である。しかし、それが気に入つてしまった。活動期間はまともに授業にできることなとできず、ひたすら部室通いの毎日であつた。部室は本館正面二階の一等地を占拠している学友会の大部屋の左側、どうして大学側がこんな利便を与えていたのであるうか。メンバー相互間の呼び掛けもルールはなかつたが「さん付け」が多かつたと思つた。

それを入社したばかりの工場勤務で実現しようと思つていただけだから相当トンチンカンであつたことは否めない。

しかし対象範囲を拡大するのに焦らず、一度も後退することもなく続けていた。在社は顧問の期間を含めて42年、その間には左遷・右遷を繰り返しながら、まわりを覗けば、「さん付け」で困る対象も限られてきた。かく

して、会社卒業の頃は、新入社員としての目標は一応達成した。しかし心易い部下からは「新井さん」と呼ばれたが、周辺は相変わらず「職位名」を使って接してきた。それは会社を卒業して韓国の慶尚大学の招聘教授になつてからも続いた。

もともと会社を卒業したら日韓の考古学と古代史を研究するため韓国の大学院に留学する考えであつた。その時、「学生で来るより教授で来たら」と声をかけて下さつたのが慶尚大学・元法学部学長(学部長)姜東湖先生である。丁度一回り年上の方であつたがとにかく素晴らしい方であつた。慶尚大学で日本語教授をされていた李相澤先生が何とか学内に日本語教師養成の日本文化研究所を設立したいと運動していたのを助け、まだ軍政下で建前としては「反日」真つ盛りの中で支援する人などいない中、とにかく研究所開設にこぎ着けたのである。それが慶尚大学をして日本語教育のメッカに発展する基礎となつた。

その姜東湖先生から、「韓国では目下の人は呼捨てにするんですよ」と注意された。しかし日本研究所の若い研究者を呼び捨てにすることなどできない。遠藤周作の『沈黙』や中野孝次の『清貧の思想』を語る韓国の方に日本人として先輩ぶることなどとてもできなかった。

年上・年下関係なく「さん付け」で呼び合う組織には

「パワハラはない」という記事に同感はそのものの、その一方で、肩書で呼ぶのではなく「さん付け」で呼び合う会社は、その後、倒産するか衰退するか発展はしないと述べている経営者もいた。上から「さん付け」を強要するような会社の場合のことだと思うが、永い間、この問題で先を走っていたつもりのものであるが、今や無理に「さん付け」に統一することなど無意味なことのようにも思っている。

世界はジェンダー問題に敏感で、敬称も統一する方向に進んでいる。日本でも小中高の学校では男女を区別しない混合名簿が既に九割に迫っていると言う。

未婚の女性と既婚の女性を区別していた「Miss」と「Mrs.」が「Ms.」になり、「チェアマン」も語感に逆らって「チェアパーソン」とするなどの流れを見ると、いずれ「Mr.」と「Ms.」も統合され「M.」にでもなるかも知れない。

しかし、欧州語には、男性名詞と女性名詞の伝統がある。その点、日本の「さん」は男女共通でありむしろ進んでいるようにも見える。

私はかつてルイ15世の公妾ボンバドール侯爵夫人のことを「侯爵の夫人」と誤解していた。王様に「キング」と「クイーン」の識別があるように、独語、仏語、伊語などのヨーロッパ系言語では普通名詞や形容詞にも男性形、女性形がある。因みにフランス語で侯爵は

「Marquis」、女侯爵は「Marquise」とある。

日本語では「サッチャー首相が男爵に叙せられた」で済むが、男性名詞と女性名詞の区分のない英国でさえも「Baron」ではなく「Baronne」を使わなければならない。「Mr.」と「Ms.」を統合するといっても、結構、難しいのである。

三、前置敬称と後置敬称

かくして日本では「さん」が最も無難に使える呼称のようである。しかし微妙な使い分けを好む国民性で「さん」に統一されることなど考えがたい。事実、「さん」と似ている敬語に、殿、様、さん、ちゃん、君、氏、女史など接尾敬称がたくさんある。

同じく韓国では「様」に対応するのが「ニム(님)」で「さん」に対応するのが「氏(외)」である。ただし、「ニム」は「社長ニム」とか「課長ニム」と上位職名につけるのが普通で、名前では必ずフルネームに付けなければならない。いずれも接尾敬語である。

北朝鮮の金正恩を「元帥様」と二重敬語でいうのを聞くと馬鹿丁寧で違和感があるが、韓国ではそれが普通の表現法なのである。

それに対してヨーロッパ圏では「Mr.」「Mrs.」「Ms.」などのように接頭敬語が普通であり、接尾敬語は弁護士に対して使う「Esp. (貴下)」くらいしかない。

だからであろうか、「Mr.」や「Mrs.」を「さん」と訳すのには、ちょっと違和感がある。「ミスター」は、もとは「主人」の意味を持った言葉で、誰に対してでも「ご主人」と呼びかけている印象がある。韓国に誰彼なく「社長」と呼びかける慣行があるのを連想するからかも知れない。

英語では、博士資格を持つ人物には「Mr.」を使わず「Dr.」を、教授職には「Prof.」を使う。女博士には「Mrs.」に準じて「Mrs.」とでも書くのであろうか、確認していない。このような前置敬語の上位には、騎士級の貴族に用いた「Sir」がある。

英文手紙では「Dear Mr.」とか「Dear Dr.」と書く場合が多い。日本の「様」「さん」「ちゃん」の系列は、この「Dear」に対応し、日本の「社長」「部長」「課長」の系列が「Mr.」「Dr.」「Prof.」の系列に対応すると考えれば、「元帥様」もあながち嘲笑の対象ではないのであろう。

ここまでつまらぬ考察を続けて、ヨーロッパには「様」や「さん」に相当する言葉がもともと乏しかったことに気がつく。「Dear」はどんな階層の方に対しても使えるようなので、「様」や「さん」もそんな感じなのであるが、ご馳走様(さん)、ご苦労様(さん)、お日様、お月さん、床屋さんのように語尾に付けて、物事を丁寧にする語と国語辞典にはある。納得する。

四、ミドルネームと名刺

考えてみれば「呼称」は「名刺」と深く関わる。その点で、『まんじ』に連載が始まった山田嘉久さんの「江戸庶民の名刺」は視点がユニークでとても面白い。

江戸時代には、武士の名前は名字(姓)と通称(疑似官名など)と名乗り(実名・諱)の三点で構成されていた。しかし明治になって「同一人が二つの名前をもっているのは紛らわしい」として、「通称」と「名乗り」を「名」に統一したのだという。

江戸時代までは、実名は文字通り諱(忌み名)であり、上位者や親などに対して呼称として使用することは憚らねばならなかった。

名字の使用に制限があった「農工商」の階層は別として、幕末には武士階級のほとんどが律令制の官名を模倣した「通称」を持っていた。おおまかに分類すると次の三種類があったという。

- ① 「大和守」、「越中守」のような正式な官名
- ② 「主膳」、「監物」のような疑似官名。
- ③ 「平八郎」「半左衛門」のような一般通称

大名などの高位者は、正式な官名を得る場合、公家官位とは切り離して、幕府の推挙のもと武家官位として勅許を得ていたが、それ以外の旗本・御家人や諸大名の家臣等もやがて私称の「名字+官名」を名乗るようになった。律令制の官名をそのまま使う場合もあったが、多く

は模倣官名で「百官名」とか「東百官」と言われている。私称とはいっても、江戸社会は相互監視が働き、社会的な地位をある程度反映していて、名刺肩書き程度の役割は果たしたと思われる。

明治になって「名」はひとつとなり「官名風」の名前は禁止されたので普通士族は諱が実名になった。しかし「農工商」ではもともと名前が一つで、しかも「官名風」であることも識らず「兵衛」「右衛門」「左衛門」などを含む名前を名乗っていたので、大慌てで改名しなければならなかった。

海軍大臣や首相を歴任した山本権兵衛盛武も「盛武」と名乗るべきところ「権兵衛」を名乗った。「権兵衛」は「官名」にはない「百官名」で「権兵衛が種蒔き」のように百姓に多い名前であった。山本権兵衛の人柄であろうか。

既に日韓の例で見たように、東アジアの漢字圏では、上位者や親などに実名で呼びかけるのは非礼として忌避されていた。実名のことを諱(忌み名)といい、「実名敬避俗」という言葉で表現された習俗であるが、正式名では浅野内匠頭長矩とか吉良上野介義央であっても、一般に内匠頭、上野介と呼ぶので実名を知られていない有名人もいたであろう。この「通称」が日本における「ミドルネーム」である。

欧米の「ミドルネーム」は、多くの場合、洗礼名、先

祖名、旧姓、母方の姓、尊敬する人名等であるが、そこに爵位のような地位を示唆する語が挿入される場合もある。例えば、サッチャー首相が一線を退いたときに男爵に叙任されたが、フルネームはマーガレット・ヒルダ・女男爵・サッチャーとなった。

ヨーロッパ系の名前に、「ヒルベルト・フォン・カラヤン」とか「シャルル・ド・ゴール」とか「レオナルド・ダ・ビンチ」のようにフォン、ド、ダなどが付いていると貴族風を感じる。もちろんこれらの前置詞は英語で言う「オブ」で貴族の意味はないが、貴族風を感じるのには、あたかもフォンやドやダがミドルネームの位置にあるためで、「○○家の」、「□□領の」、「△△地方の」などの表記の名残であり、もともとは貴族であった可能性が高いからである。

そもそも氏名とか名刺とかは、単なる個人の識別だけでなく、その個人の所属や地位や能力など社会的な序列を緩やかに表現する機能をもっている。

山田嘉久さんの「江戸庶民の名刺」も「○○様御知行所□□国△△郡◇◇村百姓良平倅嘉久」とあり、住居も職業も戸主もわかり、現代のパスポートより詳細である。更に「司馬遼太郎研究家」とでも追加すればもっと情報が多い。

類人猿の世界には序列確認とでも言うべき「マウンティング」という行為がある。サルなどが相手よりも自

分が優位に立っていることを示すために、馬乗りをする行為を意味しているが、人間も、いや人間こそ「マウンティング」の本性を持つので、各種組織や親族関係における「呼称」の使い分けは非常に重要である。だから初見で相互に、その身分や能力や所属などの「序列」や「優位性」を確認するのである。

そのためには長い「呼称」を付けたくなることもあり、ピカソのように「パブロ・デイエゴ・ホセ・サンティアゴ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネボムセノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピアーノ・デ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソ」という本名を持つ者もいる。

落語の長助さんの「寿限無 寿限無 五劫の擦り切れ 海砂利水魚の 水行末 雲来末 風来末 食う寝るところに住むところ やぶら小路の 藪柑子 パイポ パイポ パイポの シューリンガン シューリンガンの ゲーリンダイ ゲーリンダイの ポンポコピートの ポンポコナの 長久命の 長助……」も同類であろうか。

私も会社生活を終えてから使っている「名刺」は、それに準ずるほど酷い。表は、数理考古学・古代計量史と専門らしきものを頭書きに、工学博士・新井宏と続き、住所、電話、メール、ホームページを載せていて、会社の名刺に似ているが、それだけでも仰々しい。その上、裏には所属学会、所属団体、著書、経歴と小さな文字が

びっしり詰まっている。会社卒業後は異世界との交流を求めて、何でも載せた結果である。

五、「區別」と「差別」

「様」とか「さん」は単に言葉に丁寧さを加える用語として始まった。それに対し「ミスター」は、社会の階層を示す「主人」という「呼称」から始まり、「騎士」とか「博士」とか「教授」が同列に並ぶようになったもので「さん」と似る「Dear」の「呼称」とは異なる。だからジェンダー問題から「Mr.」と「Ms.」を統合して中性形を作ろうなどという発想は現実的ではない。

こんなことを考えていると、世の中は「區別する」と「差別する」を混同しているように思う。性同一性障害を持つ少数者に配慮してバスポートから性別の記載を除く動きもあると聞くと嘆かわしい。

そもそも社会の構成員が効率的に調和して生きて行くには、相互関係の「呼称」を単一化して意味を持たなくするのは、文明に逆行することだ。

ミドルネームの生まれた理由は、ヨーロッパやアラブでは漢字圏と異なり、同姓同名が多発するので、その区別の為と言われている。しかし「名字」や「実名」は自分で付けたものではないが、ミドルネームは自分も参加して付けることができる。日本で「筑前守」とか「内匠頭」とか「上野介」と律令制の官名をミドルネームとし

て名乗ったのは、そのニーズに沿ったものであろう。

日本でもミドルネームを限定した文字数で復活したらどうであろうか。旧姓、通称、芸名、四股名、戒名。位階など経歴や身分紹介の要素もあって良いと思う。

婚姻は、「両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有する」と憲法にある。婚姻は異性間と限定しているわけだ。それにも係わらずトランジェンダーのように同性婚を望む人達が多く居るのも事実である。そして同性婚でも憲法に定めた権利を享受できる制度を要求している。それなら婚姻とは別に「同性婚」を定義して婚姻同等の権利を保障すれば良いのではないか。

性同一性障害という言葉は、例外を障害と理解するところに問題がある。

全ての「区分」は統計現象としてみれば必ず連続帯で連なっている。オーバーラップする範囲がどの程度かで正常と感ずるか異常と感ずるかの違いがあるだけだ。

どこか呼称を同一にすることが男女平等と勘違いしているのではないか。前にも述べたが、大相撲は重量階級制を採用すべきだ。押し相撲が有利になると、奇形力士を次々に生み出し、力士の寿命を短縮しているのではないか。

スポーツの世界は男女を区別するのが平等である。将棋の世界でさえ、プロは男女別である。いやゴルフや囲碁・将棋でさえ、ハンディ付きがあつて、面白さがある。

そんなくだらないことを考えながら、我が家の息子達の命名のことを思った。「宏」の訓韻を踏んで、聡↓武↓康としているが芸がない。父の名が「稔」で「一文字」の名を付けたかったのだと思う。

「宏」という名前は、折からの支那事変で衛生兵として朝鮮まで出征していた父からの手紙にあつた。「博」はだめ、もし博士になったら困るから、「助」もだめ、もし教授になったら困るからと書いてあつたという。

父は四才の時、「新橋屋六兵衛」という製糸商を営んでいた父親が亡くなり、大工になり上京、日本大学建築科が開設した夜学コースで学び、国策会社の「南興水産」に入社した。夜学生にとつて博士とか教授というのはまぶしい存在だったのだろうか。私は50才の時に工学博士、62才の時に教授になった。